令狐生冥夢録

田中貢太郎

青空文庫

令狐※という儒者があった。非常な無神論者で、鬼神変化幽冥果報というようなことを口にする者があると、かたっぱしから折破して、決して神霊の存在を許さなかった。それに生れつき剛直で世に恐れるものがなかったので、傲誕自得という有様であった。

讌の家の近くに烏老という富豪があった。その烏老はありあまる身分でありながら、強欲で貪ることばかりやっていたところで、ある夜急病が起って死んでしまった。讌をはじめ烏老の不義を憎んでいる者は、いい気味だと思っていると、三日目になって甦った。人がその故を聞くと、烏老はこんなことを言った。

「わしが死んだ後に、家内の者が仏事をやって、しこたま紙銭を焚いたので、冥府の役人が感心して、それで送り還してくれたのだよ」

讌は烏老のいうことを聞いて、馬鹿馬鹿しくもあったが、正直な男だけに、楮幣を焚いたがために貪欲漢を甦らしたということがぐっと癪に触った。彼は腹の立つのをじっと耐えて嘲笑を浮べて言った。

「貪官汚吏は、賄賂を取って法を曲げるので、金のある者は罪を逃れ、貧しい者は罪になる、これはこの世ばかりと思っていたのに、冥府はこれよりもえらいと見える」

そこで讌は詩を作った。

一陌の金銭便ち魂を返す
公私随所に門を通ずべし
鬼神徳の生路を開くあり
日月光の覆盆を照すなし
貧者何に縁ってか仏力を蒙らん
富豪容易に天恩を受く
早く善悪都て報なしと知らば
多く黄金を積んで子孫に遺さん

詩が出来ると讌は面白そうにそれを朗吟した。

その夜讌は、自分の室で独り燭を明るくして坐っていた。もうかなり夜が更けて四辺がしんとしていた。

讌の頭には楮幣を焚いたがために甦ったという烏老のことや、昼間に作って朗吟していた詩の文句などがいっぱいになっていた。讌は何かしら誇りを感じて得意になっていた。

室の中へ何者かがつかつかと入ってきた。讌はふと顔をあげた。獰猛な顔をした人とも鬼とも判らない者が二人入ってきたところであった。

「地府から命を受けて、その方を逮捕にまいった」

鬼使は讌に向ってきた。讌は驚いて走ろうとした。

「逃げようたって逃がすものか」

「こら」

鬼使の一人は讌の襟がみを掴み、一人はその帯際に手をかけた。讌はそれを振り払って逃げようとした。彼は襟がみにかけた鬼使の手を掴んで引き放そうとしたが放れなかった。

「何をする」

「騒ぐな」

讌の体は釣りあげられたようになって脚下が浮いた。讌はどうすることもできなかった。

鬼使は走るようにして歩いた。讌の足はもう地べたに著かなかった。

官省の建物のような大きな建物がきた。鬼使は譔を連れてその門の中へ入った。

譔は恐る恐る前を見た。殿上の高い処に一人の王者が冕を被り袍を著て案に拠って坐っていた。その左右には吏員がおり、また鬼卒も控えていた。

鬼使は譔を階段の下へ連れて往って、そこへ押し据えるようにした。

「ここに控えておれ」

譔はそこへ跪いた。と、一人の鬼使は譔の傍に残り、一人は階段を登って殿上へ往った。

「令狐譔を捕えてまいりました」

すると王が頷いて、譔の方を見おろして激しい声で言った。

「その方は儒書を読んでおりながら、自分の身を検束することを知らないで、みだらな辞を吐いて、我が官府をそしるとは、何事だ、その方を犁舌獄へ下すからそう思え」

その声が終るか終らないかに、三四人の鬼卒が譔の処へ走ってきた。譔はもう両手を掴まれ、頭髪を掴まれた。譔は懼れて傍にある檻楯に掻きついた。

「放せ」

「何をする」

鬼卒達は譔を引き放して曳きずって往こうとしたが、譔は一生懸命に掻きついているのでなかなか放れない。

「しぶとい奴だ」

鬼卒達は無理にその手を引き放そうとした。と、その拍子に檻楯が折れた。譔はもう犁舌の獄へ下らなければならなかった。彼は大声で叫んだ。

「令狐譔は人間の儒士であります、罪がないのに刑を加えられようとしております、もし天がこれを見ておられるなら、どうか罪のないことを明かにしてください」

王の側に緑袍を著て笏を持った者が坐っていた。緑袍の男はこれを聞くと、王の方へ向って言った。

「あの男は、人の陰私を訐くことを好む者でございます、ただ罪を加えても伏しませんから、供書を取って、犯している罪を明かにするがよろしかろうと思います、そうすればとやかくいう詞がないと思われます」

王はその詞を用いた。

「よし、それでは供をさせよう」

吏員の一人は紙筆を操って譔の前へ置いた。

「これに事実を書くがよいだろう」

譔は事実を書こうにも犯した罪がないから書きようがない。

「私は、犯した罪がありませんから、書くことがありません」

王の声が頭の上へ落ちかかるように聞えた。

「その方は罪がないというが、あの一陌の金銭便ち魂を返す、公私随所に門を通ずべしは、何人の句だ」

譔ははじめて地府を嘲った詩によって罪を得たことを知った。彼は筆を執った。

伏して以う、混淪の二気、初めて天地の形を分つや、高下三歳、鬼神の数を列せず。中古より降って始めて多端を肇む。幣帛を焚いて以て神に通じ、経文を誦して以て仏に諂う。是に於て名山大沢咸く霊あり。古廟叢祠亦主者多し。蓋し以ふに、群生昏

※、衆類冥頑、或は悪を長じて以て悛めず、或は凶を行うて自ら恣にす。強を以て弱を凌ぎ、富を恃み貧を欺く、上は君親に孝ならず。下は宗党に睦しからず。財を貪り義に悖り、利を見て恩を忘る。天門高くして九重知ることなく、地府深くして十殿是れ列れり。※焼舂磨の獄を立て、輪廻報応の科を具う。善をなす者をして勧んで益勤め、悪をなす者をして懲りて戒めを知らしむ。法の至密、道の至公と謂うべし。然して威令の行わるる所、既に前に瞻て後に仰ぎ、聡明の及ぶ所、反って小を察して大を遺る。貧者は獄に入りて殃を受け、富者は経を転じて罪を免る、惟傷弓の鳥を取り、毎に呑舟の魚を漏す。賞罰の条、宜しく是の如くなるべからず。讞の如き者に至りては、三生の賤士、一介の窮儒、左枝右梧するも、未だ児啼女哭を免れず。東塗西抹、命の蹇し時の乖けるを救わず。偶不平を以って鳴けば、遽に多言の咎を獲、悔、臍を噬むも及ぶなし。尾を揺かして憐を乞うを恥ず。今其罪名を責むるを蒙り、其状を逼らる。伏して竜鱗を批ち竜頷を探る。豈に敢て生を求めんや。虎頭を料り虎鬚を編む。固より禍を受くるを知る。言此に止まる。伏して乞う之を鑑よ。

讞の供書は吏員の手から王の前へ往った。王はその供書を見てから言った。

「令狐讞の持論は正しい、志も回でない、条理も立っている、罪を加えることができない、放還して遺直を彰すがよい」

王はその後で言った。

「烏老はやはり捕えてきて、獄に置かなくてはならない」

讞はそこで最初の鬼使の二人に送られて帰ることになった。讞は鬼使に向って言った。

「僕は人間界にあって、儒を業としておる者だから、地獄のことを聞いても、今までこれを信じなかったが、今日、ここへ来たから、一度見たいと思うが、見えるだろうか」

鬼使は言った。

「見えることは見えるが、ただ刑曹録事の許しを得なくちゃいけない、では刑曹録事の許しを得ようじゃないか」

鬼使は讞を伴れて西廊を循って往った。

一つの庁堂があって、帳簿を山のように積んで吏員の一人が坐っていた。それが刑曹録事であった。鬼使の一人はその前へ往った。

「この者が地獄を見たいと申しますから、お許しを願います」

録事は頷いて朱筆を持ち、一つの帖に何か書いて渡してくれた。それは篆籀のような文字で読むことができなかった。

一行はそこから府門を出て北に向って往った。七八町も往ったところで大きな城がきた。それは鉄板を張り詰めたような黒い厳しい建物で、その中から霧とも煙とも判らない黒い気がもやもやと立ち昇って、それが空の雲といっしょになっていた。

城門の口には見るからに恐ろしい守衛がたくさんいた。皆牛の頭のように角のある顔の恐ろしい、それで体の青い紺色の髪の毛の、頭にも手足にももじゃもじゃと生えた者で、それがそれぞれ戟のような物を持っていた。それは立っている者もあれば坐っている者もあった。

二人の鬼使は前に立って往って、かの帖を一人の守衛の前にさしだした。守衛は一眼見て頷いた。

そこで一行は門の中へ入った。中からは遠濤の音のような人の泣

声が聞えてきた。それは物凄い、肉を刻まれ骨を砕かれる時のような叫びであった。譔はもう足が縮んでしまった。

物凄い叫喚の場処はすぐきた。黒い霧とも壁とも判らない物に四辺を囲まれた中に、血みどろになった人がうようよといて、それがのたうって悶掻き叫んでいた。体の皮を剥れた者、腹を裂かれた者、手を切られた者、足を切られた者、眼を剔られた者、舌を抜かれた者、それはもう人間の感情を持っていては、ふた眼と見ることのできないものばかりであった。譔は眼前が暗んだようになった。

「さあ、もうすこし前へ往こう」

鬼使の一人がそう言って前の方へ歩くので、譔は逃げ走るようにそれに随いて往った。叫喚楚毒の声は車の廻るように耳の中で渦を捲いていた。

譔の眼の前に、銅のような横倒しにしてある二つの柱があって、その上に裸体の男と女が一人ずつ縛られているのが見えた。譔はいくらか心にゆとりができていた。

門口にいた守衛のような角のある体の青い夜叉が、どこからくるともなしに刀を持って出てきて、男の方に近寄るなり、いきなりその刀を男の腹に突込んで切り裂いた。男は叫ぶ間もなかった。赤黒い血が四辺に散った。と、同時にその臓腑が流れ出た。

女の方はそれを見て叫びながら縛られている手足を動かしだした。夜叉はそんなことには頓着なく、男の腹を裂いて血みどろになった刀を持って往ってまたその腹に突き刺した。女の声はばったり絶えた。その傷口からも血といっしょに臓腑が流れ出た。

そこへ他の夜叉が湯気の立っている湯を盛った大きな杓を持ってきた。譔はあの湯をどうするだろうと思って見ていた。夜叉は男の傍へ往って裂かれた腹の上へ杓を持って往き、それを傷口へ注いだ。するとまた他の夜叉がやはり同じような湯の杓を持ってきて、それを女の腹の傷口へ注いだ。

「あれはどうするところだろう」

譔は不思議に思って鬼使の一人に聞いた。

「あれは汚れた腹の中を洗っているところだよ」

鬼使はむぞうさに答えた。

「何故洗うだろうね」

「あの男は医者だよ、あの女の夫の病気を癒してやってるうちに、あの女と姦通したが、そのうちに夫が死んでしまった、べつに手をおろして殺したというではないが、そんなことで病人を大事にしなかったから、殺したも同じことだ、だからああして腹を洗ってるよ」

「そうかなあ」

一行はまた歩いた。

僧侶や尼僧達がたくさん裸になって立っている処があった。そこは夜叉達が牛や馬の皮を持ってきて、それを尼僧の頭から覆せていた。覆せられた者はそれぞれ牛や馬になった。一人の馬の皮を被せられた太った尼は、馬になるとともにひひんひひんと言って地を蹴だした。夜叉は面倒くさそうにそのたて髪を掴んで連れて往こうとした。馬は跳ね躍って往こうとしなかった。夜叉は脚下にある鉄の鞭を取ってびしゃびしゃと腰のあたりを叩いた。肉が破れて血が飛び散った。馬は一声叫びながら前の方へ駈けだした。

「ここで畜類にせられているのは、どういう訳だろう」

譔はまた聞いた。

「あの僧尼達は、自分が手を動かさずして世を渡り、そのうえ戒律

を守らないで、婬を貪り、葷を茹い、酒を飲んだので、牛馬にして人に報いをさすところだ」

三人はまた次の処へ往った。そこには入口に榜があって誤国之門という文字が見えていた。その門の内には鉄床があって、その上に数十人の者が坐らされていた。皆重罪の者と見えて、手には手械がかかり、足には足械をし、首には青石の大きなのを首械として置いてあった。

「あの男を見るがいい」

鬼使の一人は罪人の一人へ指をさした。

「あれは何人だろう」

譔は聞いてみた。

「あれは宋の秦檜さ、忠良を害し、君を欺き、国を滅したから、こんな重罪を受けておる、他の者も皆国を誤ったもので、この者どもは、国の命が革まるたびに、引出して、毒蛇に肉を噬まし、飢鷹に髄を啄かすのだ、それで、肉が腐り爛れてなくなると、神水をかけて業風に吹かすと、また本の形になる、こんな奴は、億万劫を経ても世には出られないよ」

譔はもう家へ還りたくなった。

「もういい、家へ還りたい」

鬼使は譔を送ってそこを出た。そしてすこし歩くともう譔の家であった。譔はもう送って貰わなくてもよかった。

「もういい、ここでたくさんだ、還って貰おう、しかし、何もお礼をするものがなくて気の毒だ」

すると鬼使が笑った。

「お礼はいらない、それよりか、また詩を作って、世話をかけないようにして貰おう」

譔も声を立てて笑った。そのはずみに夢が覚めて欠伸が出た。

朝になって譔は夢のことを考えて、烏老の家へ往ってみた。烏老は前夜の三更の頃に歿くなっていた。

青空文庫情報

底本：「中国の怪談（一）」河出文庫、河出書房新社
　　1987（昭和62）年5月6日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　　1970（昭和45）年発行
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年12月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

令狐生冥夢録

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/